

# 「聖家族」試解

西原千博

「聖家族」(改造) 昭5・11) の作中人物たち、特に九鬼について考察してみたい。この作品の中で九鬼がどのように描かれているかを分析し、そこからさらに、堀辰雄と芥川龍之介との関係についても触れてみたいと思う。

九鬼については、すでに多くの研究者によって論及されてきているので、ここでは特に「聖家族」の最後の場面の分析を通して、九鬼について考えてみたいと思う。この最後の場面は、意外に従来あまり問題にされてこなかったように思う。二三の論及はあるものの、これを正面から取り上げたのは、池内輝雄氏の「聖家族」論(『国文学』昭52・7)のみではないかと思う。「私はここを、九鬼の死を一種の形而上的定点とし、そこに生者であるが故に変化しやすい心を持った三人が向うことによって、(中略)強い人間連帯が獲得されてゆく、ととらえたい」と池内氏は、最後の場面の持つ意味について述べている。

絹子はさう答へながら、始めはまだ何処かしら苦痛をおびた表

情で、彼女の母の顔を見あげてゐたけれども、そのうちにちつとその母の古びた神々しい顔に見入り出したその少女の眼ざしは、だんだんと古画のなかで聖母を見あげてゐる幼児のそれに似てゆくやうに思はれた。

この一見、唐突にも思える変貌がどうして最後に至って行なわれるのか。この「聖母」と「幼児」とは一体どんな意味を持っているのか。ここではまず、この場面が作品の中でどういう意味を持つのか明らかにしたい。特に、この場面に類似する場面が他に二箇所程あるので、その部分との関係等、それを含めて分析してみたい。その分析を通して、九鬼についての考察を進めて行きたい。また、前もって述べて置くと、この最後の場面は、恋愛とも関係しているのだらう。

## 二

最初にこのラストシーンの「聖母」や「幼児」が、作品に現われたのは扁理の夢の中であった。

そこで彼はもう一ぺんその画を見直した。すると、どうもラフ

アエロの筆に似てはゐるが、その画のなかの聖母の顔は細木夫人のやうでもあるし、幼児のそれは絹子のやうでもあるので、へんな気がしながら、なほよく他の天使たちを見ようとしてゐると、「わからないのかい？」と九鬼は皮肉な笑ひ方をした……

この夢の中で、九鬼は何を言いたかつたのだろうか。細木母娘の中に、「聖母」や「幼児」になり得る可能性が潜んでいることを示し、扁理をして、二人をそういう存在としてとらえるように促そうとしているのだろうか。そして、それが扁理にとって重要であること、あえて言えば、幸福に繋がることをも示そうとしているのではないだろうか。

また、この夢は扁理の夢であっても、単に扁理にのみかかわるものではなく、他の作中人物たちや、作品全体の方向すらをも暗示している。実際に、最後の場面に至って、細木夫人も絹子もここで九鬼が示したとおりに変貌して行くのである。つまり、「聖家族」は、一面この九鬼によって作品にもたらされた暗示・イメージを、完成して行く過程としてみることも可能なのではないかと思う。換言すれば、九鬼の暗示を他の作中人物たちが実現して行く過程とも言えるのではないだろうか。

しかしながら、この夢そのものは、作品の表面から消えてしまふ。作中人物たちは、この暗示の意味に気づかないまま導かれて行くのである。謂ば、底流として作品を支えているのである。ただ、もう一度、扁理の旅の冒頭で表面に現われてくる。

一つの少女の顔。ラファエロの描いた天使のやうな聖らかな顔。実物よりも十倍位の大きさの一つの神秘的な顔。そしていまそれだけがあらゆるものから孤立し、膨大し、そしてその他すべ

てのものを彼の目の前から覆ひ隠さうとしてゐる……  
「おれのほんとうに愛してゐるのは、この人かしら？」

扁理は目をつぶつた。

扁理の、この絹子に対するイメージは、言うまでもなく、九鬼の夢に現われたとおりのものである。そしてこの時、扁理は「ほんとうに愛してゐる」ものに気づきかける。この「天使のやうな聖らかな顔」は、彼の恋愛の象徴としてとらえることができるのではないだろうか。彼にとって恋愛は、「ダイアモンドは硝子を傷つける」ために、傷つけられることであつた。しかし、この「聖らかな顔」というイメージには、そのような苦痛の反映は感じられない。むしろ、それは「その他すべてのもの」から扁理を解放してくれるかのようなものである。恋愛は、扁理を「乱雑」から解放してくれる可能性をも含んだ筈のものであつたかもしれない。

この扁理と絹子との恋愛を妨げていた原因は、前述のように「硝子」と「ダイアモンド」という性質の違い（それは越えられない垣根・境界線の如くにある。むしろ「硝子」と「ダイアモンド」に分けるのは、そこにある垣根をこそ示したいためか）にある。しかし、実際に於て、より具体的には、お互いが自分の愛情に気づかないこと、自白しようとしなないことにあると思う。扁理は、「傷つけられない」ように、或は「乱雑」のために、絹子は、少女の「硬い心」のために、それぞれほんとうの愛に気がつかない。ところが、ここに至って、扁理はやっと自分の愛情を自白しかかるのである。「聖らかな顔」が、それを彼にさせたのである。しかも、まさにその時、絹子もまた、「始めて扁理への愛を自白」するのである。彼等の恋愛は、一つの障書を越えたと言えよう。

さらに、この旅の冒頭の場面と、最後の場面との一致こそが、この二人の恋愛の行方、成就を示す何よりの証拠ではないだろうか。扁理にとって、絹子が、「聖らかな顔」になること、それが恋愛を成就させることの条件であり、最後で、絹子が「幼児」に変貌することによって、その条件は実現する。

ただし、この旅の冒頭では、扁理はまだその本当の心に十分気づいているとは言えない。彼は自らの「乱雑さ」のために、そのことに気づきながらも目をつぶってしまう。最後の幸福な一致をもたらすためには、扁理がその「乱雑さ」を乗り越えなければならなかった。このことは、扁理の恋愛と、彼の「乱雑さ」及び、その「乱雑さ」の原因たる「九鬼の死」とは、それぞれ単独のモチーフとして在るのではなく、相互に結び付き合っていることを示している。

この恋愛の行方を考えるうえで、「ルウベンスの偽画」との比較を付け加えておきたい。池内輝雄氏は、「ルウベンスの偽画」のモチーフについて次のように述べている。

そして「彼」の中にはルウベンス描くところの美しい女性像がほとんど理想の極北として存在し、現実の「彼女」をしてその心中の理想像に近づけようとするのが、とくに後半部における「彼」のもくろみであったことが理解される。(堀辰雄『ルウベンスの偽画』と『聖家族』—東教大文学部紀要「国文学漢文学論叢」第16輯)

言うまでもなく、この「もくろみ」は成功しなかった。「彼」は「彼女」に対して、「自分の前にある少女とその心像の少女とは全く別な。二個の存在であるやうな気もしないではなかった。」と、心像

と現実とは分裂し、最後に至っても一致することはなかった。「心像の少女」の方が、現実の少女以上の存在となってしまうのである。無論、恋愛は成立しないだろう。「ルウベンスの偽画」と「聖家族」を、極く単純に比較すると、その「もくろみ」は、「聖家族」に於ては成功しているのである。そこから恋愛の成就を想定することも可能であると思う。

池内氏は、この「ルウベンスの偽画」における心像と現実との分裂に対して、「そのまま作者堀辰雄が実人生の上で得たもの」(前出論文)としているが、この「聖家族」の場合も同様に、ここに堀の実人生での恋愛の成功の可能性を読み取ることもできるかもしれない。例えば、大森郁之介氏(『論者堀辰雄』)をはじめ、従来から指摘されてきた宗瑛とのことも考えられるだろう。

しかしながら、その幸福な一致が心像の側に於て行われたところに問題が残る。心像はあくまで心像であって現実ではない。現実の少女を見ない扁理に、現実の恋愛が可能なのか、という疑問もあるだろう。当然、作者に対しても同様の疑問を禁じ得ない。或は、逆に、その恋愛の象徴が聖なるものであることは、作者が現実での恋愛の不可能性を意識してのことであったかもしれない。この問題については後でまた触れることにしよう。

最後にもう一度、この「聖らかな顔」というイメージが、九鬼が夢の中で示したものであったことを確認して置こう。これは、あの夢の中に、すでにこのような恋愛の暗示が含まれていたと考えることもできるし、また別の見方をすれば、扁理が「死んだ九鬼」に支配されていることの例としても見ることができよう。さらに、最後に幸福な一致がもたらされるのは、すべて九鬼に導かれていたためと

見ることさえできるだろう。

### 三

これまで考察してきたように、最後の場面は、一面で九鬼の夢の暗示の実現としてとらえられると共に、恋愛の成就の暗示ともとることができると思う。このことから、さらに恋愛と九鬼との關係を明らかにして行きながら、九鬼及び、最後の場面の分析を進めて行くことにしよう。

扁理と絹子との「愛の最初の徴候」が現われ始めた時、九鬼は強く扁理に影響していた。より正確には「九鬼の死」と言った方が良いだろう。

自分もまた九鬼のやうに傷つけられないうちに、彼女たちから早く遠ざかってしまつた方がいと考へた。(中略)自分を彼女たちに近づかせたところの九鬼の死そのものが、今度は逆に自分を彼女たちから遠ざけさせるのだと。

扁理は、「ダイヤモンドは硝子を傷つける。」という原理から、九鬼の如く傷つけられないように、細木家から遠ざかろうとする。それは、「九鬼の死そのものが、遠ざけさせるのだ」という。何故、「九鬼の死そのもの」と言うのだろうか。それは、九鬼が夫人との恋愛に於て、夫人に傷つけられたために、死に至つたからではないだろうか。

九鬼は何故死んだのか。彼の死は、「突然の死」「不自然な死」と書かれている。どうも普通の死ではなく、自殺であるらしいことが想像される。(堀は意識的に自殺という言葉避けたくあしれない。芥川の自殺が念頭にあればあるほど、堀は自殺という言葉を使えな

かつたのではないだろうか。)しかも「九鬼の死」は、扁理には「極めて自然に」思えたのだから、彼にはその原因が理解されていたことになる。

彼自身の心の中に隠すことが出来れば出来るほど、その気弱さは彼にはますます堪へ難いものになつて行つた。扁理はさういふ不幸を目の前に見てゐた。そして九鬼と同じやうな気弱さを持つてゐた扁理は、そこで彼とは反対に、さういふ気弱さを出来るだけ自分の表面に持ち出さうとしてゐた。

「九鬼の死」の直接の原因は知る由もないが、そこに彼の「気弱さ」と、その「気弱さ」のために傷ついていたことが、關係してゐたと考へられると思う。そして、扁理はその「気弱さ」を表面に出すことによつて、「気弱さ」自体の變革をしようとするのではない。例えば、細木家で見せる「素直さ」のように。

従来から、ここに堀と芥川の生き方の違いを見ようとして来た。例えば、石井雄二氏もここに注目している。

扁理の目に映つた九鬼の〈不幸〉は、九鬼がみずからの自然な性情に逆らつてゐることに起因しているわけだが、堀が芥川の生涯に悲劇を見るのもますこのような点である。

(中略)

扁理は自分の気弱さを世間に見せまいとする九鬼の生き方を一八〇度転換することによつて、ちょうど背中合せの場所に身を置こうとする。(堀辰雄における芥川の影響)「言語と文芸」昭45・1)

確かにここに、「芥川の悲劇を繰り返さない。」(中村真一郎)『近代文学鑑賞講座』第14巻「堀辰雄」という堀の生き方の一つの方

向を見ることができると思う。

しかし、この「気弱さ」というのは、「聖家族」のモチーフの一部でしかなく、堀の芥川に対する見方の一部でしかないと思う。何故ならば、「気弱さを表面に持ち出す」ということが、「気弱さ」を自覚し、傷つけられないように、細木家から遠ざかろうとすること意味するとすると、当然、そこには恋愛の生まれる余地はなくなってしまうのである。或は、それはこういう扁理の試みの失敗を意味するのだろうか。扁理は、細木家から遠ざかり、謂は同じ「硝子」に属する「踊り子」(彼女の臆病さを見よ)と付き合い始める。そこには、弱者同志のために(同属のため)、硝子とのように傷つけ合うことはないかもしれないが、(硝子の場合と違い、二人はかなりスムーズに親しくなって行くようだ)、同時に、そこには真の恋愛も生まれはしないのである。恋愛とは、「硝子」と「ダイアモンド」という境界を越えるところにこそ生じるのではないだろうか。傷つくことを越えてこそ、真の恋愛が成り立つのだと思う。つまり、「気弱さ」そのものの変革が必要なのではないだろうか。

作品に於ては、この「気弱さ」にかわるものとして、「乱雑」という言葉が中心になってゆくのである。あえて言えば、「気弱さ」という言葉は、九鬼の生き方に対する扁理の生き方を示した言葉であり、「乱雑」という言葉は、「九鬼の死」に対する扁理の生き方を示した言葉ではないかと思う。

ところが、作品に於て、あまり問題にされていないこの九鬼の生き方、死に至る生き方が、実は、扁理の行動に強く影響していたのではないだろうか。細木夫人との恋愛、「気弱さ」等の九鬼の生き方が、扁理の行動・恋愛を規制していたのではないだろうか。あま

りに、「死」の方ばかり強調されているように思う。石井氏は、この作品の中に「理想」としての芥川の道を進もうとすれば、そこに待ち受けているのは「死」である。しかし、この「死」を避けようとするれば己れの「理想」とするものから後退せざるを得ない」という二律背反を見い出すが、「芥川の道」とは即ち、九鬼の生き方を指すのである。或は、「裏がへし」という、九鬼と扁理の関係を示す言葉にしても、単に、扁理の裏側に九鬼(九鬼の死)が在るという静態としてとらえるべきではなく、その二人の生き方の相違として、動態として理解すべき言葉であろう。つまり、この作品で、重要な役割を果している九鬼の生き方、生きていた時の九鬼(九鬼という言葉は本来この意味のみ使すべき言葉である)が十分に描かれているとは思えないのである。村松剛氏が「九鬼のイメージ」とらえにくさを指摘した(「堀辰雄と立原道造」)「解釈と鑑賞」昭36・3)のも、このためではないだろうか。ただ、この場合は、もう一つ、「九鬼」と「九鬼の死」さらに「死」という三つの言葉の使い分けが厳密になされていないためとも考えられる。例えば、旅の場面では、「死の印―それは彼には同時に九鬼の影であった」と、九鬼と「死」が同義になっている。厳密に言えば、この九鬼は、まさに生きていた時の九鬼を指すものである。また、「裏がへし」についても、細木夫人は始め「まるで九鬼を裏がへしに云々」と言い、最後では、「九鬼の死が緯のやうに」と、九鬼と「九鬼の死」が同じように用いられ、さらに「死に見入る」と「死」とも類似されている。「九鬼」という言葉に、「九鬼の死」「死」という二つの言葉が付加され、意味の重積が行われていると言っても良いだろう。それは、一見欠点ともとれるが、逆にそこから不思議な九鬼のイメー

ジが生まれ、作品の独特な雰囲気を生み出しているとも言えるだろう。

しかしながら、この生きている時の九鬼が描かれていないところこそ、この作品を書いた作者の意図が反映しているのではないだろうか。

#### 四

堀辰雄は、十分意識して、この作品を「九鬼の死」から始めたであろう。九鬼の「思い出」(回想)等、生きている時の描写はあるがその中心は死後にあったのであろう。「芥川龍之介論(昭3)等、芥川の生き方についても考察しているが、「聖家族」はそれをふまえて、一歩先に出ようとしているのではないか。或は、芥川の死をどう受け止めるべきかを問うているのである。つまり、「九鬼の死」後、扁理たちはどう生きたか、ということと同時に、「九鬼の死」がどうなったかが問題だったのではないだろうか。小久保実氏は、「九鬼の死の意味がとらえどころのない観念ではない」(『新版堀辰雄論』)と指摘するが、堀は、「九鬼の死」そのものを、謂は、観念としても描きたかったのではないだろうか。また、観念であっても、「ルウベンスの偽画」の心象のように現実以上の存在たり得るのである。

そこで、「気弱さ」にかわって、「九鬼の死」を示す「乱雑」という言葉の分析に取り掛かろう。特に、扁理の旅の場面に注意したいと思う。

さうしてやうやく彼は理解し出した。死んだ九鬼が自分の裏側に絶えず生きてゐて、いまだに自分を力強く支配してゐたことを

そしてそれに気づかなかつたことが自分の生の乱雑さの原因であったことを。

「乱雑さ」は、扁理の裏側に死んだ九鬼が生きていたからであった。二重の意識が彼の行動に働き「乱雑」にさせていたのである。

しかし、ここでは、その九鬼の支配を否定、拒絶しているのではない。問題は、気づくかどうかであったのだ。或は、九鬼が「絶えず生きて」いたのを、扁理が忘れたために「乱雑」が生じたのである。

そして、「ただ一つの死を自分の裏側にいきいきと、非常に近くしかも非常に遠く感じながら」見知らない町を歩くことが、「何とも言はず快い休息のやうに思はれ出した。」のである。扁理は、「ただ一つの死」即ち「九鬼の死」を「いきいき」と感じることに休息になるのである。この「九鬼の死」に対する扁理のとらえ方は「九鬼の死」を客体化し、その存在を自立したものとして、あらためて認識して行くことではないだろうか。また、例えば、九鬼の「名刺」ではなく自分の「名刺」を得ることを示しているのかもしれない。

さうして自分の足もとに散らばつてゐる貝殻や海草や死んだ魚などが、彼に、彼自身の生の乱雑さを思い出させてゐた。―その漂流物のなかには、一ぴきの小さな犬の死骸が混つてゐた。(中略)扁理はちづつと見入りながら、次第にいいきと自分の心臓が鼓動するのを感じ出してゐた……

扁理は「乱雑」や「死」を、一個の客体として見る。そして彼の心臓は「いきいきと」鼓動する。ここで、あえて一つの愚問を呈したい。一体、何時扁理の心臓は鼓動を止めたのだろうか。少くとも、15歳の扁理は、「まだ快活で、無邪気な少年だった。」(彼が無邪気なのは、恋愛を、さらには死を知らないからだ)。ところが20

才の彼は「すこし悲しさうに」している。つまり、扁理の心臓が止まったのは、九鬼が死んだ時ではないだろうか。当然、九鬼の死後、特に恋愛等が、彼の心臓をいきいきと鼓動させなかったことも考えられるが、直接には九鬼の死んだ時とするのも、あながち否定できないのではないかと思う。九鬼が死んだ時、扁理が九鬼を喪失した時、彼の心臓は止まり、今、もう一度その存在を確認した時、彼の心臓は動き出したのではないだろうか。

池内氏は、最初に引用した論文の中で、この旅の部分を「自己を成立させているものからの逃避ではなく、むしろ進んで受容してゆこうという姿勢に他ならない。」とし、「死を媒介にした新しい生の獲得」というテーマを見い出す。前にも述べたように、ここでは九鬼の支配を拒絶しているのではない。むしろ池内氏が「受容」と言うように、肯定しているときえ言えるだろう。しかし、単に「受容」と言うよりも、一端、その「九鬼の死」を自分から切り離して客体として見、その存在を客観的なものにして行こうとするのである。

以上、旅の分析を行なってみたが、あまり自信はない。むしろこの旅は、扁理の〈自己確認の旅〉(池内氏)として、或は、菊地弘氏のように「完全に主体性や自我喪失の境涯からの脱出を表徴する」(芥川から堀辰雄へ)「国文学研究」昭34・9)ものとして、とらえるべきかもしれない。しかし、ここで起ったのは、単に扁理の内部の変化のみではない。九鬼、「九鬼の死」の再認識こそが行なわれていたのである。そして、何よりも、もしこれが「自己確認」ということをのみ示しているのなら、何故、最後に至って、九鬼の示したイメージが実現されなければならないのか。それは、まさに

九鬼の影響力を、支配を、もう一度現わしていることに他ならないのではないだろうか。「九鬼の死」により、「聖母」や「幼児」のような世界が生まれ得ることを、また生み出そうとすることを示したかったのであり、九鬼の死が決って九鬼を喪失したことはなく、死んでもなお、その存在が「生きつづけている」ことを示したかったのではないだろうか。先に、扁理の心臓にこだわったのもこのためである。九鬼が死んだこと、それが、扁理を死に近づけたのであり、今また、九鬼を見い出すことによって、彼は生に導かれたのである。極言すれば、それは九鬼を復活させることだと言っても良いだろう。

作者のテーマもここにあったのではないだろうか。芥川が死んだことを、芥川の喪失としてではなく、その存在をもう一度意味あるものとして再認識しようとするのではないか。「芥川の死」として、客体化し、とらえなおそうとするのではないだろうか。さらにそれが、堀にとどまらず、他の人々にも及ぶようにと考えていたのではないだろうか。

## 五

「死があたかも一つの季節を開いたかのやうだった。」

「聖家族」は、「九鬼の死」から始まった。その死によって、扁理は細木夫人、絹子と出会い、新しい季節が始まった。ところが、その「九鬼の死」は、他の作中人物たちに「苦痛」として、謂ば否定的にとらえられてしまう。九鬼の存在は、作品の中から次第に衰退して行く。作中人物たちは、九鬼を、「九鬼の死」を忘れて行こうとするかのようだ。扁理は、九鬼に支配されていることに気づかず

「九鬼の死」によって出会った細木家から遠ざかって行く。細木夫人は、「九鬼の死」から大きな「苦痛」を感じていたが、やがて、「月日が九鬼の死を遠ざければ遠ざけるほど、彼女に欲しいのは平静さだけであつた。」と、「九鬼の死」を忘れようとする。また、それを思い出させる扁理が、「遠ざかって行くのを見ても、それをそのままにして置いた。」のである。細木夫人は、最初、扁理と絹子とを「母らしい注意をしながら、その二人をもつと近づけやうとした」。しかし、今は「九鬼の死」によりその母としての役割を忘れている。絹子は、扁理に「裏がへしにした九鬼」を見ていて。それが、彼女に「苦痛」を与えていたと言っても、或る意味では正しいのではないか。そういう中で、九鬼は扁理の夢の中でその存在を再認識させるような一つの暗示を提出する。或は、それは九鬼の願ひであつたかもしれない。

行きつくところまで行つたように、バラバラになつてしまつた作中人物たちは、扁理の旅、扁理の死の予感（河野さんは死ぬんじゃないつて？）――それは謂は九鬼と同じ道一を元にもう一度その結び付きを取り戻す。扁理は、その旅に於て、「死んだ九鬼が、自分の裏側に絶えず生きて」いることに気づき、その「乱雑さ」を乗り越えて生に向う。それは同時に、彼の恋愛の成功をも示すものであつた。そして、この二人の新しい恋愛が、細木夫人に「母としての義務」を取り戻させる。それは、「聖母」としての義務を取り戻したこともあるのだ。また、それが九鬼の願ひでもあつたのである。ようやく、我々は、最後の場面に到着した。この最後の場面は、「九鬼の死」と作中人物たちの到達点であつた。ここが前の文章に比べて、いささか唐突な感じがするのは、言うまでもなく、これが

何よりも九鬼の夢に於ける暗示・イメージの実現に他ならないからである。「聖母」と「幼児」は、扁理と絹子との恋愛の行方を暗示する。また、「九鬼の死」によつてもたらされた「苦痛」からも解放されて行くのである。そして、それは九鬼の理想、願ひであつたかもしれない。すべてのモチーフは、最後の場面に収束して行くのである。それは九鬼の死が、九鬼の喪失ではなく、「九鬼の死」として、作中人物たちを導いて行ったことを示している。換言すれば、九鬼の理想を作中人物たちが実現して行ったとも言ひ得るのではないだろうか。

言うまでもなく、この九鬼、「九鬼の死」のとらえ方にこそ、堀の芥川に対する一つの姿勢を読み取ることが出来るだろう。大森郁之介氏（既出）は、芥川と「聖家族」とを結びつけることに對して、「昭和五年初秋という時点で、二年夏の芥川の自殺は今なお〈衝撃〉であり得たろうか。」という疑問を、提出する。確かに、芥川の自殺と執筆との間には、三年間あり、今なお〈衝撃〉たり得るか疑問であるが、むしろ、この三年間は、堀が芥川の死を客体化していくのに必要な時間であつたと思う。この作品で問われているのは、その死後にある。昭和五年に芥川を描くことは、やはりそれなりの意味があつたと思う。

「聖家族」のテーマは、九鬼の暗示に基づいて、新しい世界を實現することにあつた。それはまた、九鬼を復活させることと言つても過言ではあるまい。堀は、堀に限らず、芥川の周辺の人々が、このような復活をさせることを願つていたのではないだろうか。

（筑波大学大学院博士課程日本文学）